

中部支部巡検会報告：相良油田・子生まれ石

著者	青木 克顕
雑誌名	静岡地学
巻	108
ページ	15-16
発行年	2013-11-22
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00024603

中部支部巡検会報告：相良油田・子生まれ石

青 木 克 顕

1. はじめに

2013年1月27日(日)、松本仁美会員の案内で、相良油田・子生まれ石の巡検会を実施した。以下に、そのあらましを報告する。参加者10名(会員6名、一般参加4名)。

2. 巡検ポイント

(1) 三亀ヶ谷 佐藤力太郎氏宅ガス井戸(牧之原市立坂部小学校の南)：フロートを井戸に浮かべ、集めたガスを家に引き、家庭用の燃料として最近まで使用していた。当日も、メタンガスを思われる気体を盛んに噴出していた。

(2) 仁田 白岩浅間神社 相良層群女神石灰岩(榛原総合運動公園南西角)：杜殿の奥に、わずかに女神石灰岩が露出する。貝化石も確認できる。

(3) 男神山, 女神山相良層群女神石灰岩観察：現在、立ち入ることができないため、山体を観察。女神背斜の軸部付近にあるため、相良層群(1000万年前～500万年前頃)の分布域中に、その下の大井川層群の石灰岩が顔を出していると思われる。

(4) 菅ヶ谷 油井相良油田探掘の中心地, 原油の観察：富田利夫氏のご好意で、同氏所有の採油井戸から採油を行い、小瓶に入れて持ち帰ることができた。上から井戸を覗き込むと、すぐ間近まで油が上がってきていることが分かる。火をつけると、炎を出して燃えた。

(5) 油田の里公園 相良油田の原油油井小屋 油徴, 採油槽の観察：相良油田の原油は、硫黄分が非常に少なく、軽質油～特軽質油に含まれる原油である。茶褐色の澄んだ原油は、揮発性に富み、2サイクルの発動機は精製しなくても動かせるほどである。野外には当時の採油小屋が復元されている。公園脇の小川を観察すると、油徴が認められた。

(6) 西萩間 掛川層群堀之内砂泥互層：大興寺の東側、萩間川の湾曲地に幅約200m高さ約20mほどの砂泥互層が観察できる。砂層、泥層とも柔らかく、厚さは20～50cm。西側に傾斜しており、スランプ構造が観察できる部分もある。泥層は砂層に比べて風化され、ボロボロと崩れ落ちている。落石も多い。上部は、河岸段丘が形成されている。この崖から中新世から鮮新世の示準化石のサガリテス(マキヤマ)が産出されたことから、相良層群という説もある。

(7) 子生まれ石 石灰質ノジュール：鮮新世の掛川層群(400万年前～200万年前)堀の内泥層中から産出される石灰質のジュールである。化石などが核となりその周りに石灰質分が濃集してノジュールができると考えられる。崖に列状にノジュールが並ぶことから、その層の堆積した当時の海底がノジュールを作りやすい環境だったと思われる。近くの大興寺の住職が代わる度に崖から丸い石千代田東小学校

が落ちてくるという言い伝えがあり、子生まれ石と呼ばれるようになったらしい。遠州七不思議に数えられている。

3. 終わりに

今回の巡検は、長島明会員がライフワークの一つとして長年研究を続けられてきた相良油田を中心に行われた。長島会員には、巡検下見にも同行していただき、長年の研究成果について現地を歩きながら解説していただいた。同氏の30年以上にわたる研究に敬意を表するものである。巡検会当日の資料も長島・松本両会員の共作によるものであり、本報告もこの資料にもとづいて記載した。

今回の巡検には、静岡市理科同好会から4名の参加があった。今後とも、地学に対する関心を広げていきたいものである。最後に、本巡検会に便宜を図っていただいた佐藤力太郎氏、富田利夫氏には、心より感謝する次第である。